

Title	東山之會
Author(s)	愛甲, 弘志; 加藤, 聰
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 257-260
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

,研究会通信

東山之會

齋藤茂・下定雅弘・乾源俊・浅見洋二・中木愛・芳村弘に籍を置く愛甲弘志・加藤聰の両名が世話役となって、は京都女子大学を会場とする。現在の参加者は、会場校究者らも集い、一年におおよそ八回前後開催され、現在究者は中国古典文学研究者を中心に和漢比較文学の研当会は中国古典文学研究者を中心に和漢比較文学の研

ながら国際会議の様相を呈している。京都大学などに籍を置く中国の研究者らも加わって、さ張凌志・馮艶の諸氏を中心に、大阪大学・立命館大学・道・上原尉暢・劉小俊・佐藤菜穂子・王宜瑗・姜若冰・

なる。

その沿革と命名の由来について

当会の沿革を述べると、一九八〇年代の終わり頃、京

加藤聰

た。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということにた。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということになったりと増えていき、とうとう研究室に入りきれなくなったりと増えていき、とうとう研究室に入りきれなくなったとがら、会場を現在の京都女子大学に移すことになったとから、会場を現在の京都女子大学に移すことになったとから、会場を現在の京都女子大学に移すことになった。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということにおいる。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということにおいる。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということに

も会の名称は記されていない。いま思い起こせば、読ん記)と題して、当会の活動が紹介されているが、意外に動報告」にも、「中唐という時代を知るために」(愛甲動報告」にも、「中唐という時代を知るために」(愛甲 立の会にはもともと正式な名前はなかった。たとえ

ないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないた作品や書物の名前から、「聯句の会」とか、「御覧さような会ではないのかい」と呼ぶことについてもまったく意に介するものでもないのは、そもそもが名前にこだわるような会ではないないた作品や書物の名前から、「聯句の会」とか、「御覧さいた作品や書から、「職句の会」とか、「御覧さいた作品や書から、「職句の会」とから、「職句の会」とから、「ないだけない。

会の組織にもこだわらないところが、当会のうりと言っの世話係にすぎない。つまり会の名前にこだわらない、事」というふうに書いてはみても、実のところまったく甲と加藤は会場借用の申請の必要から、一応、「代表幹ていない。会場となっている京都女子大学に籍を置く愛ていない。会場となっている京都女子大学に籍を置く愛

からである。

ら。 続いてきたもっとも大きな理由のひとつだとも言えよていいかと思う。このようなスタンスが当会が今日まで

活動内容とその成果について

う。

当会でははじめ、韓孟の聯句を読んでいたが、それを当会でははじめ、韓孟の聯句を読んでいたが、それを中唐の元和年間に翰林学士、令狐楚が憲宗の命を受けは中唐の元和年間に翰林学士、令狐楚が憲宗の命を受けな中唐の元和年間に翰林学士、令狐楚が憲宗の命を受けな中唐の元和年間に翰林学士、令狐楚が憲宗の命を受けるの詩がいかに野心的で、刺激的なものであったかがよらの詩がいかに野心的で、中唐の詩僧、皎然の『杼山集』を読みはじめることにした。皎然には他に『詩議』やを読みはじめることにした。皎然には他に『詩議』やを読みはじめることにした。皎然には他に『詩議』やを読みはじめることにした。皎然には他に『詩議』やを読みはじめることと実作との関係に興味があったからである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島のである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島の

されている。皎然の『杼山集』も、 訳注担当者の原稿を齋藤茂・愛甲弘志・中木愛・加藤聰 た。そして現在、読み進めている賈島の詩については、 洋二・齋藤茂 が主編となって『詩僧皎然集注』(共編愛甲弘志・浅見 愈詩訳注』第一冊(二〇一五年四月 展していき、すでに川合康三・緑川英樹・好川聡編 の四名が編集整理して、『中唐文學會報』(中唐文学会) 〔第二三号 二〇一六年十月〕を順次、公表している。 同 『賈島詩譯註(一)』(第二一号 二〇一四年十月) (二)』(第二二号 二〇一五年十月)、『同(三)』 二〇一四年三月 汲古書院)が上梓され 大谷大学の乾源俊氏 研文出版)が上梓

の研究者はもとより、周裕鍇・張猛・陳正宏・郭英徳・会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほ会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほの研究者はもとより、周裕鍇・張猛・陳正宏・郭英徳・



く知られるようになったことはたいへんありがたいことけてもらった上に、彼らのお陰で国外にも当会の名が広なんら酬いる術がないのにも関わらず、みな快く引き受なんら酬いる術がないのにも関わらず、みな快く引き受なんら酬いる術がないのにも関わらず、みな快く引き受なんら酬いる術がないのにも関わらず、みな快く引き受なんら酬いる流がないのにも関わらず、資金も名を列ねている。当会は会費も徴収しておらず、資金も名を別ない。当会には、一般のでは、一般のでは、一般のでは、一般のでは、一般のでは、一般のでは、一般のでは、

多くの参加者たちの情熱をより強く掻き立て続けるものずっていってはなるまい。今後もこのような研究の場が言ってよい。しかしこれを単なる遺産として漫然と引き起こったのであり、それは中国にもよく知られるほどで起こったのであり、それは中国にもよく知られるほどで起こったのであり、それは中国にもよく知られるほどでにの時期、間違いなく、中唐文学研究に一大旋風が巻きこの時期、間違いなく、中唐文学研究に一大旋風が巻き

でなければならない。

むすび

えてたぎる情熱がなければ叶わなかったにちがいない ら聯句を巻いていったのと同じような真剣さ、それに加 かし韓愈と孟郊が持ちうるすべての力をぶつけ合いなが 氏が孟郊の句を担当して読み解いていく作業は、そのむ 読書会にまで遡る。思うに、 の共感を呼び起こし、一九九〇年十月、中唐文学研究会 この情熱はその後、中唐文学を研究する多くの同学の士 あたりの消息については川合氏が『中唐文学の視角 (現在の中唐文学会) 松本肇·川合康三編 前 述のように、当会は、 が立ち上がるまでになった。この 一九九八年二月 創文社)の 川合・齋藤両氏の韓孟聯句 川合氏が韓愈の句 を、 齋藤